

文 研 考 古 談 話 会 2017 年 度 活 動 報 告

2017 年

4 月10日 2017年度運営委員会議

5 月15日 文研考古談話会 第162回例会
(第1回新人発表会)

佐藤亮太「諸磯式土器の変遷と施文手法の変化」

谷川 遼「房総における古代造瓦体制の研究：木下別
所廃寺の位置付け(予察)」

5 月22日 文研考古談話会 第163回例会
(第2回新人発表会)

有村元春「新王国時代のエジプトにおけるミケーネ土
器の受容」

横山未来「サンボー・プレイ・クック遺跡群、都市区
における出土遺物からみたイーシャーナブラの諸様
相」

呉 心怡「中国国外で発見された元青花：出土元様式
青花瓷器からみる輸出の様相」

5 月29日 文研考古談話会 第164回例会
(第3回新人発表会)

堀川洸太郎「カンボジア・アンコール期の瓦につい
て：研究の現状と課題」

比留間絢香「縄文時代後晩期の土製仮面の分布につ
いて」

6 月19日 文研考古談話会 第165回例会
(第1回博士後期課程研究発表会)

渡邊 玲「旧石器集団の領域と作業地点構成」

山崎世理愛「エジプト中王国時代の葬送における装身
具カテゴリー」

7 月24日 文研考古談話会 第166回例会
(第2回博士後期課程研究発表会)

福田莉紗「ビーズネットの型式学的研究の予察」

アブデルアール・アハメド「第4ノモスにおけるメン
チュ神の展開と起源」

10月9日 文研考古談話会 第167回例会
(夏季調査報告会)

久保山和佳、星野宙也「2017年度ホンジュラス・コ

パン遺跡における測量・レーダー調査」

横山未来、堀川洸太郎、辻角桃子、高橋 亘、成宮秀
彬、梅澤美典「サンボー・プレイ・クック遺跡群寺院
区N1塔 2017年夏季発掘調査報告」

竹野内恵太、佐藤亮太、比留間絢香「加曽利貝塚での
測量・GPR調査」

10月23日 文研考古談話会 第168回例会
(第3回博士後期課程研究発表会)

竹野内恵太「エジプト初期国家社会の石製容器生産と
領域形成過程」

10月30日 文研考古談話会 第169回例会
(第4回博士後期課程研究発表会)

伝田郁夫「南武蔵における埴輪生産の一様相：川崎市
高津区末長久保台古墳出土埴輪の分析事例から」

12月7日 文研考古談話会 第170回例会
(第1回溯航執筆者発表会)

川上真那「碇石の基礎的研究」

川村悠太「東京都大田区浅間様古墳における横穴式石
室の調査：SfM/MVSを用いた3Dモデルの作成」

菅沼奏美「新王国時代における供物台表現に関する考
察：葬送・奉納ステラの図像を中心に」

堀川洸太郎「インドシナの古代瓦：「クメール瓦」前
史」

12月11日 文研考古談話会 第171回例会
(第5回博士後期課程研究発表会)

山田綾乃「大工記号の分析による造船工程復元：甲板
室の事例を中心に」

12月14日 文研考古談話会 第172回例会
(第2回溯航執筆者発表会)

呉 心怡「元墓の集成」

佐藤亮太「多摩川流域とその周辺地域の諸磯式土器」

谷川 遼「下総における古代寺院の選地動向」

比留間絢香「土製仮面の基礎的研究」

編集後記

『溯航』は1978年7月、『文研考古連絡誌』として創刊されました。1987年に『溯航』と名を改めて再出発して以来、今号で第36号となります。

創刊39年、第36号という中途半端な数字ではありますが、昨今の学問的状況を鑑みて、今号より早稲田大学レポジトリに登録し電子化することになりました。これに伴い雑誌の体裁もB5版モノクロからA4版フルカラーに変更しました。より多くの人に読んでもらえるようになれば幸いです。

さて、私が学部3年の頃、その年に刊行された『溯航』にある文章が掲載されました。当時まだ初々しく、研究活動に漠然とした希望を抱いていた私は、どれほどその内容を理解していたのでしょうか。

以下、「少々、苦言を呈しておきたい」という近藤先生節から始まる巻頭言の抜粋です。

「久しぶりに巻頭言を記す機会を得たので少々、苦言を呈しておきたい。「溯航」の名付け親としては、「溯航」という雑誌の状況はある意味、危機的である。…中略…現在、院生諸君の内的な力でこの雑誌が刊行されているとは必ずしも言えない状況です。この種の雑誌は、一人一人の熱意と献身によって刊行されるべき性質のものであって、決して上からの力によって維持されるものではありません。…中略…研究活動は極めて厳しい状況にあります。自分自身が何をすべきなのか、どのような方向性で進んでいくのか。真剣に考える必要があります」

(近藤二郎 2012「巻頭言—ぬるま湯の中—」『溯航』第30号)

あれからもう6年。『溯航』はまだ「ぬるま湯の中」を安穩と漂っているのでしょうか。昨今の論文投稿の減少、投稿辞退の増加という現状は、大学院生の研究活動に対する意識の低さが垣間見え、現在、この雑誌は必ずしも「院生諸君の内的な力」と「一人一人の熱意と献身」によって維持されているとは言えない状況かもしれません。

しかし、今号には、時代も地域も研究方法も様々な、とても早稲田考古らしい9本の原稿を頂戴しました。『溯航』は大学院生の研究発表の場であり、多様な専門が入り乱れる“早稲田考古らしさ”を発信する場でもあります。執筆者の大学院生達は、今回の執筆経験を糧に、これから各々の舞台に赴き、荒波に揉まれながらも“早稲田考古らしさ”を十二分に発揮し、ご活躍されることを期待します。

末筆ながら巻頭言を頂きました長崎潤一先生、ならびに編集をお手伝いいただいた考古学研究室の皆様にご感謝申し上げます。

(編集：渡邊 玲、編集補助：川村悠太、有村元春)

『 溯 航 』 第 3 6 号 2 0 1 8 年 2 月

発 行 2018年2月26日
編集・発行 早稲田大学大学院文学研究科考古談話会
〒 162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1 早稲田大学文学部考古学研究室
Tel. 03-5286-3646 / (内線)72-3111

印 刷 所 中西印刷株式会社
〒 602-8048 京都府京都市上京区下立売小川東入ル
Tel. 075-441-3155 / (Fax.)075-417-2050
<https://the.nacos.com>
